科学技術高校・理科通信

いきもの記

Vol.112 2024.7.2

生物教員 佐藤龍平

エサキモンキツノカメムシも登場
奥山先生と虫と植物

５月末に１年生の宿泊研修で筑波実験植物園に行ったとき、特別に研究員の奥山雄大先生が園内を案内してくれた。奥山先生は**昆虫と植物の相互作用**について研究されていて、チャルメルソウという植物とキノコバエという虫の切っても切れないパートナー関係を明らかにし、業界を驚かせた。その内容が紹介された本『多様な花が生まれる瞬間』（図書室にもあります）を以前読んで奥山先生のことを知り、筑波に行くなら是非ともお会いしてみたいと思って植物園にリクエストしてみたのだ。**まさか、本当に案内していただけるとは思わなかった！**無論、クラスのみんなはそんな裏話は知らないので、私一人で興奮していた。

奥山先生は、キハダの木につく**エサキモンキツノカメムシ**やエゴノキにつく**エゴツルクビゾウムシ**を紹介してくれた。「キハダやエゴノキは園内に何本もあるのに、これらの虫は**なぜか毎年特定の木だけに集まる。不思議です。**」とのこと。同じ木が何本も生えていたとき、虫は何を基準に選んでいるんだろう。ここにも何か、植物と昆虫の、**私たちには見えない結びつき**があるのかもしれない。

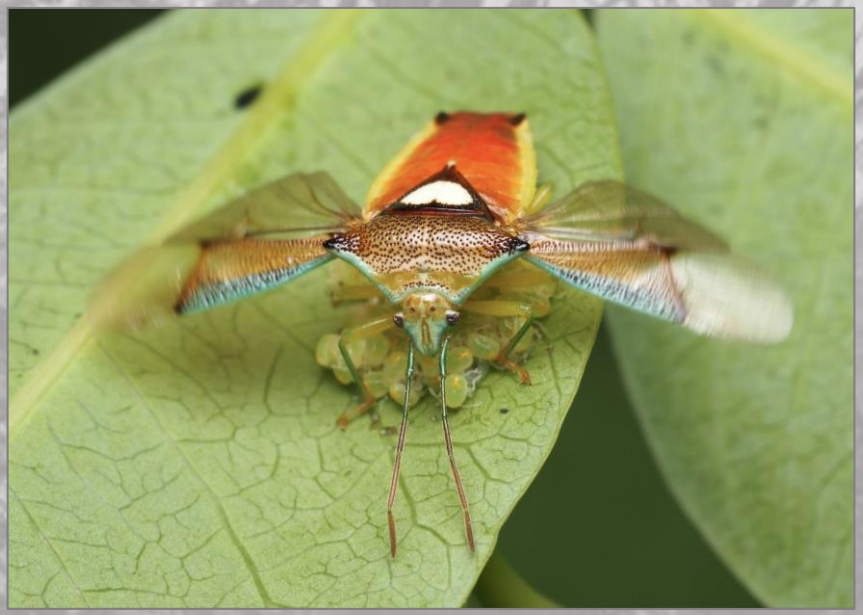
奥山先生は、もともとは植物より虫が好きな高校生だったという。でも、大学で花と昆虫の密接な関係について知り、植物に注目し始めたそう。そうして植物のことを学んだあとに、改めて虫を見たときに見え方が全く変わって視野が広がりどんどん面白くなっていったそうだ。

「自然は分からないことだらけ。ネタはいっぱいある。」「興味ある対象をどれだけよく見るかが大事」とお話しいただく。そして、「自然を見るときは『**問いを立てる**』ことがとても大切。でも、必ず『**解決可能な問い**』にすること。」とも仰っていた。実験、検証のできない問いは研究にならない。「解決可能かどうか判断するためには知識を増やす必要がある。**そのために勉強するんだ。**」

第一線で活躍する研究者から研究の極意を教わることができて、何とも贅沢で刺激的な１日になった。

国立科学博物館の奥山先生に植物園を紹介していただく。とくに先生の専門である昆虫と植物の関係性についてお話しいただいた。（筑波実験植物園にて。5/30）

紹介してもらったエサキモンキツノカメムシを撮影。高校生がみんなでカメムシを撮影する様子はちょっとシュール。



↑奥山先生が話題にしていたエサキモンキツノカメムシ（この写真は猿江公園のもの。6/7）
子供を守る珍しい習性があり、寄生バチなどが近づいてきて危険が迫ると、母カメムシは体をかがめながら羽ばたいて威嚇する。
いきもの記Vol.53でこのカメムシを紹介した時はこの羽ばたく威嚇シーンを撮影できなかった。ようやく撮れた。

卵を狙う寄生バチ（矢印）
母カメムシの足元には１齢幼虫がたくさんいる。後ろの方に銀色の卵がいくつか見えるが、これはおそらく寄生されている。寄生バチは母カメムシの足元の隙間でそろりそろりと卵に忍び寄っていた。

参考：奥山雄大(2018), 多様な花が生まれる瞬間, 慶應義塾大学出版会